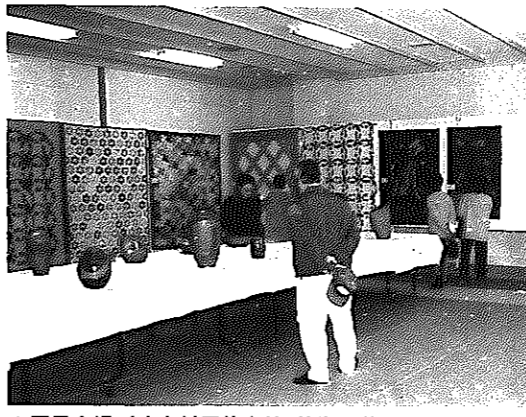


1市3村の住民の力作、 4会場にズラリ

白根市、味方村、月湯村、中之口村が合同で企画した広域文化祭「中ノ口川さわやか文化祭」が、十一月二十九日、三十日の二日間開催されました。これは、各市村の住民に芸術・文化活動の発表の場を提供し、住民相互の交流を図ってもらうと今年初めて実施されたもの。カルチャーセンターなど一市三村の公共施設を会場に、日本画六十四点、美術工芸・陶芸・手芸百七十四点、書道百二点、洋画三十二点、写真二十九点が展示されました。力作がずらりと並んだ会場は、たくさんの



▲展示会場 (味方村民体育館・美術工芸、陶芸、手芸)

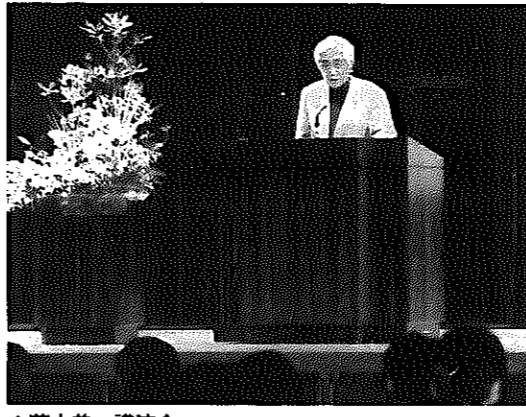
中ノ口川さわやか文化祭

人が訪れ、見事な作品に見入っている様子。三十日には、カルチャーセンターで「わがまち・むらの二十一世紀、ゆめものがたり」と題した市村長によるパネルディスカッションが行われたほか、作家・藤本義一さんによる講演会が行われました。藤本さんは「防災のまちづくりとボランティア活動」と題して、自らの阪神大震災の被災体験をもとに講演。「阪神大震災のときに、いろんな人がボランティアだといってやってきた。



▲市村長によるパネルディスカッション

しかし、自分の食糧を持ってこずに配給品を食べたり、カメラを片手にVサインを出したりしているようなにせ者も多くいた。日本人はボランティアを流行のように思っている。自分の中で何が出来るのかを考えてからやるべき」とボランティアのあり方を厳しく批判。災害後、避難所で生活するさまざまな人に接し、人間の生きざまや自身が言葉によって表れるのを目の当たりにして、「言葉は自分の中身を全部表すもの。人を感動させるような言葉は年を取ってから言えるものだが、日本人はなかなか言えない。年を取っても頭を使い、工夫して生きていけば充実感があり、他人を感動させる言葉も出てくるはず」と話しました。切れの良いジョークを交えたテンポの速い話の運びに、訪れた人たちは時間のたつのを忘れて聞き入っていました。



▲藤本義一講演会

意見、提言を 市政に反映

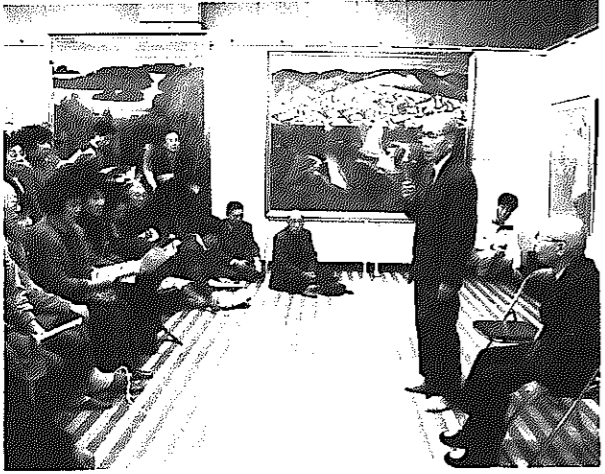
平成9年度市政モニター会議十一月二十六日、平成九年度の市政モニター会議が市役所で開かれ、竹内市長からモニターに委嘱状が手渡されました。会議では、竹内市長が「行政と市民の相互理解が深まれば、市民生活の底上げができると思う。モニターの皆さんからきたんのない意見をいただきたい」とあいさつしました。市政モニター制度は、市政に対しての意見や要望などを市民から聞き、市政に反映していくと平成六年度から始まったもの。今年度のモニター十三人の皆さんをご紹介します。

- 【市政モニター】 富山浩美(戸頭) 河野睦美(大通南) 長谷川良枝(大畑新田) 渋谷純子(和泉) 土田幸子(大通南) 谷和久(十五間) 鈴木美香(西笠巻新田) 小林越子(下茨) 吉川久五(五六の町) 今井健(古川) 牧野純子(巻巻桜町) 若林洋子(鰐湯) 佐藤和枝(古川団地) ※敬称略



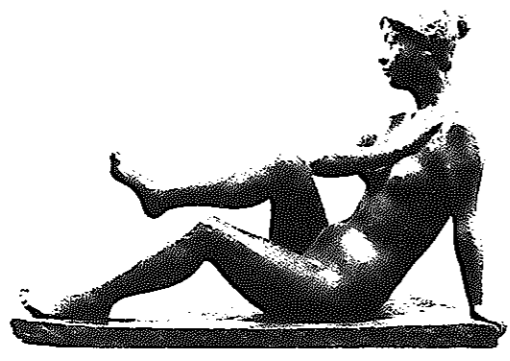
創作の裏話、 たっぷりと

ふるさと巨匠二人展特別講話

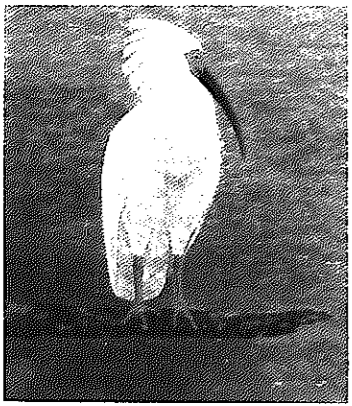


白根市出身の日本画家・長井亮之さんと彫刻家・千野茂さんの合同展覧会「ふるさと巨匠二人展」が、十一月二十二日から三十日までカルチャーセンター特設会場で開催されました。ふるさとが生んだ二人の巨匠の作品が一度に見られる機会はないとあって、八日間で開催に訪れた人の数は延べ二千八百人に上りました。期間中の十一月二十三日・二十日には、両作家による「特別講話」や県芸術審査員・県美術家連盟会員による「作品解説会」も行われました。特別講話で、長井さんは「一回全部調べてみないと絵がかけないものだから、鳥をかくときには、六・七羽飼って写生したり、解剖前に見せてもらって羽をじっくり調べたりして、ようやく鳥の絵がかけるようになりました」と、写真に基づいた画風の裏話を披露。「構図を決めるのが一番苦労するところ。大作をかくときには、それと同じ構図の下絵をかいてみて、大作に取り掛かります」と話しました。一方の千野さんは「私は不器用で院展に四回落選したんです。郷里に帰ろうかと師匠に言ったら、不器用は天が与えた大事な作風と思って頑張りなさいと励まされたものでした」と彫刻の道志した当時を懐かしそうに振り返りました。「絵画も彫刻も、いかにうそをつくって本物に見せるかだと思ふ」と千野さん。「モデルからヒントを得ながら作っていますが、そのままの体を作っているわけではない創作が。私はモデルが帰ってからの創作が

本当の仕事だと思えます。かつて、ミロのビーナスのような素晴らしいモデルが来たことがありましたが、あまりにも美しすぎて逆に作れなかったの。数回でお断りしたこともありましたが」と、創作にまつわるエピソードも話しました。会場には、たくさんの人たちが詰めかけ、作品にまつわるさまざまな質問なども飛び出していました。



▲かたち (千野茂)



▲朱鷺 (長井亮之)

市民の晴れ舞台、 今年で30周年に 市民芸能祭

音楽や舞踊など市民の芸術活動の発表の場としてすっかり定着した市民芸能祭。今年で三十周年を迎えたのを記念して会期も二日となり、十一月二十三・二十四日開催されました。一日目は音楽部門、二日目は舞踊部門が行われ、四十二団体が出演。三十周年記念企画事業として、音楽部門では「白根の四季」をテーマに、舞踊部門では「新湯を踊ろう」をテーマに、コーラスグループや民謡サークルなどが出演。それぞれのテーマをイメージした歌や踊りなどを披露しました。このほか、白根北中学校・白根第一中学校の吹奏楽部も特別出演し、華やかなステージを繰り広げました。会場のカルチャーセンターには大勢の人が集まり、日ごろの練習の成果に、惜しめない拍手を送っていました。

